





拾  
84  
5

東京  
學校  
圖書

まじりくまきりし  
奇跡玉姫草紙第五

繪姿乃事

うもほけや佐野屋後よれ去来れ冬雪のう降て松乃  
も月枝も折れ折て谷の折る川りれと我も侍人をも  
侍人及きふれ小候侍者乃宿せと在正と雪の  
うもほけのうもほけねばあれと宿せも月之うねど月  
任あらして余りよらん者しきよと宿あててくまら  
せーが程も風を逐く返く返く返く難れる霧の毛をふ降  
ぬくともいり川く降をさそふ馬とはあましく燃し  
んをたると店べうもあたいとさしとん板しとく退付

四上三式二上





















人のより四三十三の比まをり不用あましくおほぬまは鎌倉人  
 上りし附の藤の宿りへそと招くもくはど其比をいふ  
 照とちてゆりし具後環とあしあふると号くは懐み  
 持ある文よた多たあそ人其後と音多な文よとさふ  
 あれ又其地の錦の書袋を照女とちてしるありて派其  
 友とまてく一人も空しくありしと實ゆる家の泣り  
 みやてくふれ内か一人く色いふ俊よは春帯めあゆる人  
 とくあそふ神たまを不敬佛あふんむねばらの名と環と照  
 其後この環を照と法名をあらしたるをむりは給海  
 鎌倉去るよりのし照女をおさる類よ余りよそくゆ

けり程不夫ては是をどそ泣きぬまもと獄あふくはどやゆり  
 よりと老幼不定のさくむねは年の若とこのむなま  
 あつれどもみそへとねえたるく自志あつる裏る奴の残る  
 後よりまこのあつるやと後をまむく清くは言ふた  
 是をゆてちちうあつるめぐりく今宵此はすまうとあし  
 丁もふ家あれ其巾拍落の甚なうそまをゆりどとゆり  
 ちりちりあふまことあつるまふとあつるとあつる女乃  
 名を環とちて照とせとらなちのめこのまが其まを環と  
 送りし女の藤ちりて照とせの懐よあし細りしとせ  
 ちり濃の園書書着の若くはありし村小年とちて心よぬの



あしきものありしうらなきをききむくろ出せしは近所のあり  
 常の姉女のりちし彼文或りまじる夜などを及りて控く遊のむ  
 しと近所の宿どもそれをむかひぬるとと巡礼といひて死  
 女房の病は際たるをゆめられそのありひくろ夜をまかせし  
 此女を指しりてあまかせんとそれをも懐へりてあまかせし  
 其巡礼しを照むむとぞありりゆめを女と指しりてあまかせし  
 余の懐が空しくなりしるやむかひぬるとと巡礼といひて死  
 念仏回向をしつゆふよ再むらぬまじる遠らればぬれを余の  
 人しとおのひしがぬれぬとありりるやとあまかせしあり  
 さぬえとつゆふよと有けりぬれぬとありりるやとあまかせし

教多しとつゆふよ我未るやうに存しむらむらためしうらぬ  
 かなゆればはま川二人乃子の一人の平らるの原の水く川を  
 あり一人の道の人の茶とありしるやむかひぬるとと巡礼といひて死  
 遊のつゆふよとつゆふよとつゆふよとつゆふよとつゆふよと  
 其の腹よりけし子のみの年れ其うとつゆふよとつゆふよと  
 山神を祭し小社のゆめ人の茶とありしるやむかひぬるとと巡礼といひて死  
 物よとつゆふよとつゆふよとつゆふよとつゆふよとつゆふよと  
 若しつゆふよとつゆふよとつゆふよとつゆふよとつゆふよと  
 たを欠けりしものありり大勢に人の入りあれは我一人とつゆふよ  
 かつんとつゆふよとつゆふよとつゆふよとつゆふよとつゆふよと





五七



五七







榮花とゆふせんとはもむ縁あぬあつらぬくまの女房も其  
 中入らぬらんざん今うらなえとさぬ人と照女がまといひ  
 まゝせしは名を呼びて置長うへあへ思ひまへとてやをまひ  
 つ月の世もよすれがたは乃侍庵んととれどもあすれ  
 ぞとのらんととれどもそのはまばあんの道不どあま  
 ちもあまのりてあまのりぬやいほさるあべ一画とれ人あまのり  
 ちらう其まゝあつた又今のりの治とてむもあは親子あつた  
 思ひたれ二人より格照せの格君侍従よま侍とあまのり  
 たりとよと思ひ侍り一ぬ又母人乃侍従あまのり居のよはけ  
 とも思ひあつた一とのあつたぞやもあまのりたは何とぞ

はみまゝせん某の上母の必佐平のたあ何がまよ太帝某た  
 とりのよそのの後姿乃侍従とてあまのり一環があれる  
 えそよと人我故も格君の身とあり一と人後長者とまこ人  
 人よ置置せられ今の中く小女長我まあとせんとぬうて一と  
 あれまゝせしはあまの白雪のまごどるはるのあまのり  
 のまごまされよとせあまのり人斗とまのあまのり一と小女  
 のむ川と小女よ使あまのりまよ一あれた格もよ後とるどあまのり  
 時四つみの樹とよあまのりの樹ひくやとある川へあまのり一とせし  
 かけらるあまのりあまのり一の人と引あけ母のめと人ほれあまのり  
 ちねんとせしはあまのりの女房へ何名とあまのりちねんとあまのり







おくり父母を治ふあつていへば友とてあつていへば色あふ  
 足殺し親をいへばあつていへばあつていへばあつていへば  
 長まが鯨時りあつていへばあつていへばあつていへばあつていへば  
 それそのあつていへばあつていへばあつていへばあつていへば  
 鎌倉よ登り殺のまつていへばあつていへばあつていへばあつていへば  
 おり人どもあつていへばあつていへばあつていへばあつていへば  
 とを鎌倉の大名あつていへばあつていへばあつていへばあつていへば  
 支配すあつていへばあつていへばあつていへばあつていへばあつていへば  
 其う環々あつていへばあつていへばあつていへばあつていへばあつていへば  
 とあつていへばあつていへばあつていへばあつていへばあつていへば

九度乃る血の事

郡司夫婦へいぢぢ鎌倉へあつていへばあつていへばあつていへばあつていへば  
 対面しあつていへばあつていへばあつていへばあつていへばあつていへば  
 十寸後あつていへばあつていへばあつていへばあつていへばあつていへば  
 あつていへばあつていへばあつていへばあつていへばあつていへばあつていへば  
 さのあつていへばあつていへばあつていへばあつていへばあつていへばあつていへば  
 う左右のあつていへばあつていへばあつていへばあつていへばあつていへばあつていへば  
 ふうりあつていへばあつていへばあつていへばあつていへばあつていへばあつていへば  
 傳へるあつていへばあつていへばあつていへばあつていへばあつていへばあつていへば  
 一トとあつていへばあつていへばあつていへばあつていへばあつていへばあつていへば



かくく是といふ親子のありはかなれども他人の目も  
 めいくの心も夫とあはれむむがごとくあめいね侍従  
 を買ふくま小叔の宝を送るをうらぐ大福長者へ  
 のるを預かる小物の衣を添ふあらしめたる侍従  
 侍従が是をまゝ多く神妙にけりへされがごとく  
 由暇くぬり親子三人あつれむ悦ひいさんぐ回里を  
 久りくる去程小かたはる人へ日と名らんま婚姻を  
 んと申る後従の年月もむいへ父母は廻りあめ  
 嬉しくさふ糸紛くいりりーが此と我守りりも又も思ひ  
 又も何とけり父母の心は背りりと思へり女のまゝは欠

女の及ふけきいとされば父母の心はそむくまありといふ  
 一世の契のありは後さよふあれば父母は申おこめ  
 時とあれはむくせ不孝とありて家多きむむむむむ  
 家よさぬらぬくはく人さむくせぬたよりと預るふり  
 もさぬとあれども夫ぬく女のみちもくすてふ我もと  
 この及びくさむむ舞ととりとれば若も心のかきぬ内  
 一日もさむさうい送りゆふくせん是後と老くもの人の老  
 のありありとやうくよすなればかあよげ人も同く  
 ひよといふあしん人と後流しとめたるやまふあつて  
 人よといふ人のさむとあめい定めりたあれといふか











こそ不忠候ふれ久伺の云身行兼ハ剛毅司奴兼ハ身  
 身を背又乃心よ背き勢氣をうけく佐濃の國へさし  
 ひの身とありていつりし或時侍従うらなひたしむるに  
 きあつた候とて是頼母しくあひて心とりしとてこれ  
 ハ腹在ぬ叔父めいあつたらうさうなとていつあつた氣を  
 けし我をよめこひきまらまらあさほしめり座敷と  
 あつし一夫をよめうくしひと其者よいつあまれまら  
 しの行兼ハ身よとりしとて母の正しやへし徳とて  
 けし又つの時より十日あつたを中食ひをうられし思あさか  
 らむてよ書たれ房海へつころし一巻物更の正あつた

双兼父の亡霊ふくとはけくやを勢氣をやりあつた  
 候て旧里ふまえりか候あつた心よまえり見乃力  
 ともありたるとて是常う方よりめ是兼ハ彼をせとて  
 小平よりあつたとつあつたをうけりてはつてあつ  
 め殺の室をわたりたれりやうぬしとみをうとてしと  
 を深く恥色分の報謝をよらよむ事り五條のそふ太ハを  
 中殿よめし一おんもやう務れしおこあひりり外浪  
 浪らるる備代の着るもあそと愛よりうり集り衆動  
 をとらびみたれハ磯りさくまののめゆとてたハとて兼の  
 二兼よりたれ家造しと子孫らんもやうとつりり終



うらなふり

玉皇經之三

享和之癸亥年

正月吉祥日

馬喰町二丁目

若林重光衛門版

音読環草紙第五之卷



